エミリィ・ディキンスンとインディアン・パイプ

上　石　実加子

目　次

１．はじめに
２．ディキンスンとインディアン・パイプ
３．詩作とガーデニング
４．脳に咲く花
５．おわりに

１．はじめに

エミリィ・ディキンスンが自然をこよなく愛した詩人であったことは，「自然」を扱った彼女の詩，なかでも植物や花々にさまざまなイメージが付加されたおびただしい数の詩作品からすでに明らかである。これは，「花の引用が彼女の作品のいたるところに現れる」ことが，「ディキンスンの人生に花が大きな役割を果たした」(Eberwein, 115）からだという指摘と無関係ではないであろう。

エミリィがアマストで暮らした19世紀という時代は，「アメリカ史上，自然がもっとも人びとに親しまれ，祝福された時代であった」(Farr, 1）といわれている。西欧の伝統文学に則った多くの詩人たちがそうであったように，ディキンスンが特に多く用いた花の代表格といえるものはバラであったが，マスター・レターズを含む他の重要なテクストにおいて彼女が自分自身を表すのに用いた「ヒナギク」の花をはじめとして，クローバーやキンポウゲ，リンドウ，イワナシ，アネモネ，ラン，スミレなど，実に400を越える植物の名が彼女の詩の中に散見できる。

エミリィ・ディキンスンの死後，1890年11月にメイベル・ルーミス・トッドとT・W・ヒギンスンの編纂により，ディキンスンの第１詩集がアメリカで上梓されたとき，その表紙に採用されたのは，インディアン・パイプという植物の絵であった。以後，1891年に第２詩集，そして５年後の1896年に第３詩集が刊行されることになるが，第１詩集から第３詩集まで，各詩集の表紙は，その色に若干の変化が施されるものの，すべての詩集の表紙にインディアン・パイプのデザインが採用されていた。ディキンスンが好んだあまたある花の中から，バラでもなくヒナギクでもなくスミレでもない，インディアン・パイプという植物が表紙に採用されることになったのは，いったい何故だったのか。

興味深いことに，第２詩集がロンドンで出版されたとき，表紙にはインディアン・パイプではなく，無地の黄色い布張りのものが採用されていた。それはこの植物が，「イングランドでは馴染みがないので，シンボルとしては意味をなさなかった」(Bingham, 180-81）からだと言われているが，この指摘は，逆に，インディアン・パイプがアメリカにおいてはシンボルとして意味をなすものであったことを示唆している。

本論は，このインディアン・パイプとエミリィ・ディキンスンの関係について考察するものである。アメリカでこそ意味をなすインディアン・パイプとはいかなる植物だったの

キーワード：エミリィ・ディキンスン，インディアン・パイプ，ガーデニング

か，また，それがディキンスン詩集の表紙に採用されたことが何を意味していたのか。この植物に対する同時代的な関心と，ディキンスンが園芸愛好家であったことに注目しながら考察していきたい。

２．ディキンスンとインディアン・パイプ

表紙の絵は，詩集の編者のひとりであったトッド夫人みずからが，ディキンスンの晩年にあたる1882年に，彼女のために描いてプレゼントしたインディアン・パイプのパネル画を原画とするものであった。

1891年７月18日付けのトッド夫人からヒギンスン宛ての手紙では，インディアン・パイプの絵が「奇妙にも彼女にぴったり」合っているというエミリィの友人の声を報告したあと，トッド夫人はこの時点で“witch-hazel”の絵も描いてみていることをヒギンスンに伝えているが，これを受けてヒギンスンは，７月23日，トッド夫人に宛てて以下のように書き送っている。

> I have written to ask Niles if we shld. Seek a new title or rely on “Part Second.” If we have a title, how would “Indian Pipe and Witch Hazel” do－they being the two weird flowers & hence significant of her. It really needs both to characterize her. We cd. Then put yr. Design（w.h.）on the new volume. T.W.H（Todd，150）

インディアン・パイプと“witch-hazel”はどちらも「気味の悪い」(weird）花で，それゆえに彼女を表わすものなのだと述べているのがわかる。

インディアン・パイプは，夏から秋にかけて主に激しい雨のあとに山中の樹の下に密かに自生する腐生植物で，太陽のもとでは暮らさず，つねに日陰で暮らす。また，葉緑素を持たないため全体が蝋のように白く，きわめてデリケートな植物である。

チャールズ・ミルズポウはこの植物について次のように言っている。「この奇妙な薬草は“corpse plant”という名にふさわしく，死人に共通する青ざめた白い外見に非常に似ている。さらに触ってみると，それは冷たく，湿り気があってひんやりとしており，注意深く扱ってもすぐに腐敗して黒く変化してしまう」(Millspaugh, 411-12)。

実にこの植物は“corpse plant,”“ghost flower,”“wax plant”などの別名をもっており，こうしたインディアン・パイプの外見は，32歳以降，つねに白い衣服を身にまとい，父の屋敷から一歩も外へ出ずに過ごした隠遁の詩人エミリィ・ディキンスンの姿を彷彿とさせている。

興味深いことに，ヒギンスンの２番目の妻であった詩人のメアリー・サッチャー・ヒギンスンが“Ghost-Flowers (Monotropa Uniflora)”と題するインディアン・パイプについて書いた詩を「アトランティック・マンスリー」誌に1893年に発表している。

> In Shining groups, each stem a pearly ray,
> Weird flecks of light within the shadowed wood,
> They dwell aloof, a spotless sisterhood.
> No Angelus, except the wild bird’s lay,
> Awakes these forest nuns; yet night and day
> Their heads are bent, as if in prayerful mood.
> A touch will mar their snow, and tempests
> Defile; but in the mist fresh blossoms stray
> From spirit-gardens just beyond our ken.
> Each year we seek their virgin haunts, to look
> Upon new loveliness, and watch again
> Their shy devotions near the singing brook;

Then, mingling in the dizzy stir of men,
Forget the vows made in that cloistered nook.[1]

「銘々の茎が真珠のような光を放ち，森の日陰で，気味の悪い光をぽつぽつと放って群れをなし」ているインディアン・パイプの様子は，「とりすまして無垢の姉妹関係を結んでいる」と喩えられている。続いて「野生の鳥のさえずりを除いては，どんなお告げの祈りも／この森の尼僧たちを目覚めさせることはない」のは，「夜であれ昼であれ」この植物が「あたかも祈っているかのように首を垂れ」ているからである。

この花を形容している“weird”という形容詞は，メアリー・サッチャーの夫ヒギンスンや，先に触れたトッド夫人がエミリィを形容するときに用いている形容詞であり，さらに，インディアン・パイプが森の尼僧“forest nuns”という言い方で表わされているところは，“New England nun”たるエミリィ・ディキンスンを彷彿とさせる言い方になっているとして注目に値する。

また，同じく同時代詩人のキャサリン・ビーチャーもまた，“To the Monotropa, or Ghost flower”と題する詩を以下のように書いている。

Pale, mournful flower, that hidest in shade
Mild dewy damps and murky glade,
With moss and mould,
Why dost thou hang thy ghastly head,
So sad and cold? (Sanders, 199)

「青ざめて哀調をおびた花，それは日陰で／露に濡れた湿気と陰気な湿原に／苔やカビと一緒に隠れている」と始まり，地面に向かって頷くように花を咲かせる様子が「死人のように頭を垂れる」として，この花のごく一般的なイメージ，つまり「インディアン・パイプ」イコール「死人のごとき花」というイメージが歌われていることがわかる。

トッド夫人からインディアン・パイプの絵のパネルを受取ったディキンスンが，お礼の手紙を次のようにトッド夫人に書き送っている。

Dear Friend

That without suspecting it you should send me the preferred flower of life, seems almost supernatural, and the sweet glee that I felt at meeting it I could confide to none. I still cherish the clutch with which I bore it from the ground when a wondering child, an unearthly booty, and maturity only enhances mystery, never decreases it. To duplicate the vision is almost more amazing, for God's unique capacity is too surprising to surprise. I know not how to thank you. We do not thank the rainbow, although its trophy is a snare.

To give delight is hallowed－perhaps the toil of angels, whose avocations are concealed－

With joy,

E. Dickinson

(L769)

ディキンスン自身にとってインディアン・パイプは，同時代詩人たちの感覚とは違って，死の花ではなく「大好きな命の花」(the preferred flower of life) であり，それでも幼い頃から「この世ならぬもの」の感覚を覚える，神秘的な花であった。

３．詩作とガーデニング

ディキンスンが詩人としてこの上ない芸術的創造性を発揮したとされる1862年の「驚異の年」を含む，1860年代から70年代は，同時に，彼女が園芸愛好家として花々を育てる腕を磨いていた時期と一致している。クチナシやジャスミン，スイートピー，ツバキ，ユリ，ヘリオトロープ，その他多くの野生の植物を蒐集し，栽培し，分類して押し花にすること，ガーデニングは，詩を書く以前に，彼女の中心を占めていたものであり，実際に，ディキンスンは生涯において，「おそらく詩人としてよりも，園芸家として，広く知られていた」（Farr，３）とさえ言われる。

15歳のとき，ディキンスンは，エドワード・ヒッチコックが校長を務めるアマスト・アカデミーにおいて，植物学を勉強している。19世紀において，植物標本集は，植物学の研究に最重要とされたものだった（Mallonee, 229）。植物標本を作ったのは，学者ばかりではない。学校へ通う子供たちもまた，植物標本集を作っている。ディキンスンは，アマスト・アカデミー時代の友人で，すでにアカデミーを去っていた友人アバイア・ルートに宛てた手紙の中でも，学校で，植物学を学び，クラスメートの子はたいてい植物標本を作っていることを伝え，アバイアにも標本を作るよう伝えているものがある（L6）。彼女が作った植物標本集は，現在，ハーバード大学にあるホートン・コレクションに保管されているが，ディキンスンは，実に399種類もの花を押し花にしていることが分かっており，そこにはインディアン・パイプも標本化されていた。彼女はかつて，文芸批評家ヒギンスンに宛てた手紙の中で，子供の頃に北米の花々について書かれたヒッチコックの本を読んでいたと書いている（L488）。

自然と哲学のあいだに引かれた平行線上に，キリスト教の教えの証しを発見したヒッチコックの教えに心を動かされた教え子たちが「アマスト・カレッジの付近で培養されることなく育った植物のカタログ」を出版するに至るが，ヒッチコック自身が，このカタログを「植物標本集にとても便利な索引として役立つ」ものとして位置づけた（232）。531属，1,447種の植物が列挙されたこの「カタログ」のなかに，やはりインディアン・パイプは顕花植物として紹介されている（Mallonee, 232）。

アマスト・アカデミーでの学校教育のあと，ディキンスンが通ったマウント・ホリヨウク女子専門学校は，ヴィクトリア朝風のお上品な伝統を受け継ぐ校風の教育機関であったが，そこにおいても，学習内容は，文学や芸術，音楽のほかに，植物学が含まれていた。植物や花々について勉強することは，女性たちにとって上品なつとめと考えられ，学問の対象が美しくて繊細であるばかりでなく，彼女たちを戸外に導いて学業に勤しませる健康的なものと考えられたからである。さらに，植物学は神学的な論拠として渇望されるものであった。というのも，アマストにおける福音主義的なプロテスタンティズムに彩られた数十年のあいだは特に，「自然現象を研究することが神の計画を理解することに通ずる道と考えられた」(Mcdowell, 22）からである。

ディキンスンは，アマスト・アカデミーで植物学を勉強する前から，家では母親の庭仕事を手伝い，父親エドワードが彼女のために植物標本温室を建てたことは知られるところである。季節を問わず，花を育てたいという心理的欲求を満たすこの温室は，他のアマストの女性たちと自分の娘を区別するための，父親のスノビッシュな行為のあらわれであると解釈されることがある。エドワードが，娘エミリィに植物標本温室を与えたのは，娘を喜ばせたかったからだけではなく，彼にとっては，「花々を育てることが，詩を書くことよりも女性に適した仕事だったからなのかも

しれない」（Farr, 4-5）といわれている。

先述したように，ディキンスンが詩作に没頭した時期，それは彼女がガーデニングにおいても熟練の域に達し，育てる側に知識や慎重さや洞察力を必要とするような花々を育て上げていた時期と一致する。30歳を過ぎてから父の屋敷を一歩も出ることなく，いわば隠遁生活を送ったとされるディキンスンの神秘の伝説の裏で，ディキンスンは，家族や親類たちと，ガーデニングを通して植物への愛を共有している。しばしばレター・ライターともいわれる彼女は，1,000通を超える手紙を書き，その手紙には頻繁に花々が同封された。花はつねに彼女の精神的，感情的なインデックスとなり，手紙や詩のなかで，自分自身を花々に結びつけ，「庭をつくることを詩を作ることに結びつけて」（Farr, 4）きたのである。

ディキンスンは，自分の家の庭を「私のピューリタンのような庭」（L685）とか，「ヴィニーの神聖なる庭」（L885）と呼んでいる。これらの庭は，ある意味で彼女の隠遁の場所となったが，それはまた一方で，より広範な世界との接触を可能にする場でもあった。父親が建ててくれた植物標本温室，この父親の書斎から離れたところにある南向きのガラス張りの温室のことを，ディキンスンは「食堂から離れたところにある庭」（L279）と呼んだが，ここで，彼女は花々を生き返らせたばかりでなく，その花々から，多くの詩を生み出した。このようなディキンスン的な庭のことを，エバーウェインは「可能性の庭」（Eberwein, 122）と呼んでいる。

4. 脳に咲く花

インディアン・パイプは視覚的にも植物学的にも変わった植物である。これは植物学者サンダーズの言葉「インディアン・パイプが奇妙であるのは，見かけのみならず，そのライフスタイルにあるのだ」(Sanders, 198) という説明に明らかである。植物学的にいって，このインディアン・パイプは光合成によって自ら養分を蓄えることができないために，生き長らえる手段として，腐敗した有機物質から栄養分を取り入れることを学習した寄生体である。葉緑素を持たず，菌類のようでありながら，この植物は顕花植物，つまり花を咲かせる植物で，花に見られる資質のほとんどすべてを有している。トッド夫人がこの植物の絵をディキンスンに贈ろうと決めたときの回想には以下のようにある。

> In the autumn of 1882 I had wished to send Emily Dickinson some little remembrance, and by a happy thought decided to paint for her a group of those <u>weird</u> but <u>perfect flowers</u> of shade and silence, the monotropa, or “Indian Pipe.”（Todd, 439）

“weird” ではあるが “perfect flower” であるという表現が，腐生植物でありつつ顕花植物であるこの植物の特性をうまく言い当てている。また，すでにみてきたメアリー・サッチャーの詩にもあったように，“Spirit-garden” からはぐれ出るように咲いてくるインディアン・パイプの様子は，一見死人のように見えても，生命力の強さすら感じさせる。エミリィとインディアン・パイプの類似性を，彼女が家族にいわば「寄生して」暮らしている点にあるのだとする辛辣な指摘も存在する（McDowell, 173）。しかしここでは逆に，パラサイトとしてのエミリィは，詩人としての精神の強さとリンクしてくると考えたい。

ディキンスンの詩の中に，インディアン・パイプは以下のように引用されている。

> ’Tis whiter than an Indian Pipe—
> ’Tis dimmer than a Lace—

No stature has it, like a Fog
When you approach the place—
Not any voice imply it here
Or intimate it there
A spirit－how doth it accost—
What function hath the Air?
This limitless Hyperbole
Each one of us shall be—
'Tis Drama－if Hypothesis
It be not Tragedy—

(Fr 1513/J 1482)[2]

1879年頃執筆されたこの詩は，1896年，トッド夫人とヒギンスン編纂の第３詩集に収められた際，「精神」(The Spirit) というタイトルがつけられている。第１行目の「これは」(‘Tis)や，３行目の「それ」(it) という指示代名詞は，詩の中ほどで“spirit”を指し示すものらしいことがわかる。ディキンスン自身の意図とは全く無関係につけられたそのタイトルが示唆するもの，それはすなわち，ディキンスンが，インディアン・パイプを探すように「精神」を探るプロセスが描かれているといってよいだろう。インディアン・パイプやレース（おそらく白いレースであろう）で形容される「精神」が，「名声もない」，さながら「霧のように」近づく者の目をくらますさまは，エミリィ・ディキンスン自身の生き方に重なるものがある。

32歳以降，白い衣服しか身につけなかったといわれるエミリィが，その存在を確認しようと訪れる者たちを殊更に避けた隠遁者として，人知れず詩を書き続け，1862年から65年にかけての驚異の詩作の期間を経て彼女がたどり着く結論，すなわち，生きている間の名声を放棄することを選択した詩人としての精神性をこの詩は表わしている。

This is a Blossom of the Brain—
A small－italic Seed
Lodged by Design or Happening
The Spirit fructified—

Shy as the Wind of his Chambers
Swift as a Freshet's Tongue
So of the Flower of the Soul
Its process is unknown.
When it is found, a few rejoice
The Wise convey it Home
Carefully cherishing the spot
If other Flower become.

When it is lost, that Day shall be
The Funeral of God,
Upon his Breast, a closing Soul
The Flower of our Lord.

(Fr 1112/J 945)

第１スタンザにおいて，「これは頭脳の花だ／精神が結実させた／着想や出来事の宿る／小さなイタリック体の種子である」となっている「これ」は，自分自身の「精神」が結実させた「着想」が詰まっているもの，すなわち，ディキンスン自身の詩のことを指していると読める。詩は，脳の中で開花したさながら花のようで，彼女自身の精神のメカニズムが，予想のつかないプロセスを経て詩を作り上げるさまが描かれているといえないだろうか。

ヴィクトリア朝中期の人びとは，「花々」(posies) と「詩」(poesie)という美的感覚に訴える言葉を結びつけるのを好んだ（Farr, 4）といわれるが，ディキンスンの「花々」は，まさに彼女の「詩」に結びつき，「詩」そのものとなった。ディキンスン詩集の編纂者のひとりだったトッド夫人が，彼女の手書きの原稿のことを「ファシクル」(fascicles) と呼んでいる。「小束」を意味するこの語は，「19世紀における，花束と同義語であった」(Farr, 14) ことも，その十分な裏づけとなっている。

5．おわりに

もしも，エミリィ・ディキンスンの妹ラヴィニアが，エミリィの詩集出版に向けて奔走しなければ，陽の目をみなかったかもしれない詩集に，インディアン・パイプは永久に咲いている花である。そしてもしも，メイベル・トッドが，アマスト大学の天文学教授の妻としてアマストにやってこなかったら，エミリィ・ディキンスンという詩人の作品を，我々は知らずにいたかもしれない。

1881年８月31日，メイベルは夫とともにアマストに着き，９月にエミリィの兄オースティンと出会う。オースティンの妻スーザンからエミリィの詩を紹介されたメイベルは，激しい衝撃を受けるが，このときオースティンはメイベルにすっかり魅了され，1882年にはふたりが愛人関係となったことは，エミリィ・ディキンスンとインディアン・パイプのエピソードに，ひとつの捻れを生み出している。

メイベルがエミリィにインディアン・パイプの絵を描いたパネルを贈ったのは1882年９月。メイベルはディキンスン宅を訪ねては，エミリィとラヴィニアの希望でピアノを弾いたようだが，実際には，メイベルとエミリィは一度も顔を合わせたことがなかったという(Johnson, 56)。部屋の外の暗がりで静かにメイベルのピアノを聞いていたエミリィを，メイベルは“rare, mysterious Emily”(Layda, 376)と回想している。

エミリィの晩年においてディキンスン家と懇意になったメイベルが，どれほどエミリィをよく理解していたかは分からない。また，文芸批評家ヒギンスンは，ディキンスン生前には，彼女の詩が出版に値するほど力強くはないと判断した人物である。このメイベル・トッドとヒギンスンという二人の人物が，詩集を編纂し，インディアン・パイプを表紙に採用したという事実を，私たちは心に留めておく必要があるだろう。後年，隠遁生活に入ったまさに“mysterious Emily”の神話は，「詩集の売り上げを促進させるために焚き付けられたもの」(McDowell, １）であったかもしれないからである。ディキンスン自身は，インディアン・パイプのしとやかさと上品さを好んだといわれるが，詩集をめぐって生起するインディアン・パイプとエミリィの皮肉的ともいえる諸事情が，インディアン・パイプという植物に対する同時代的関心事と相俟って，詩人を形容する象徴となっているのである。1893年，ディキンスン第２詩集が出たあと，第３詩集が出るまでのあいだに，ヒギンスンの二番目の妻メアリー・サッチャー・ヒギンスンがインディアン・パイプについての詩を掲載していること，これは今まで考察してきたように，インディアン・パイプのようなディキンスンを意識したものとして読むことが可能である。葉緑素を持たないインディアン・パイプが実は顕花植物であるように，ディキンスンは詩人として生きる道を選び取り，メアリー・サッチャーの詩にあるように，「私たちの視界を超えた精神の庭からはぐれでるように」頭脳に咲く花を咲かせた，まさにインディアン・パイプのような詩人であったといえるのである。

註

１．初出はMary Thacher Higginson, “Ghost-Flowers,” *The Atlantic Monthly*. Vol. 72, Issue 429. (July 1893)である。

２．フランクリン版の詩集はFr，ジョンソン版の詩集はＪとしてそれぞれ詩の作品番号を記している。

（本論は，平成17年７月に日本エミリィ・ディキンスン学会におけるシンポジウム「エミリィ・ディキンスンの愛」において口頭発表したものに加筆・訂正を施したものであり，同年の北星学園大学「個人学術研究第３号」における研究成果の一部である。）

引用文献

Franklin, R. W. *The Poems of Emily Dickinson*. Massachusetts: Belknap Press of Harvard University Press, 1998.

Goodale, Elaine, "Indian Pipe," *Scribners Monthly, an Illustrated Magazine for the People*. Volume 19. Issue 2. (December 1879): 198.

Bingham, Millicent Todd. *Ancestores' Brocades: The Literary Discovery of Emily Dickinson, The Editing and Publication of Her Letters and Poems*. New York: Dover Publications, INC., 1945.

Eberwein, Jane Donahue. Ed. *An Emily Dickinson Encyclopedia*. Connecticut: Greenwood Press, 1998.

Farr, Judith. *The Gardens of Emily Dickinson*. Massachusetts: Harvard University Press, 2004.

Higginson, Mary Thacher. "Ghost-Flowers," *The Atlantic Monthly*. Vol. 72, Issue 429. (July 1893)

Johnson, Thomas H. Ed. *The Poems of Emily Dickinson: Including Variant Readings Critically Compared With All Known Manuscripts*. 3 vols. Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press, 1963.

———. *Emily Dickinson: An Interpretive Biography*. Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press, 1960.『エミリ・ディキンスン評伝』新倉俊一・鵜野ひろ子訳，国文社，1985年

Johnson, Thomas H. and Theodora Ward. Eds. *The Letters of Emily Dickinson*. Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, 1958.

Layda, Jay. *The Years and Hours of Emily Dickinson*. 2 vols. New Haven: Yale University Press, 1960.

Mallonee, C. Barbara. "Leaving Latitude: Emily Dickinson & Indian Pipes," *Georgia Review*. Vol. 53. No. 2. (Summer, 1999): 223-244.

McDowell, Marta. *Emily Dickinson's Gardens: A Celebration of a Poet and Gardener*. New York: McGraw-Hill, 2005.

Millspaugh, Charles F. *American Medical Plants: An Illustrated and Descriptive Guide to Plants Indigenous to and Naturalized in the United States Which are used in Medicine*. New York: Dover Publications, INC., 1887.

Sanders, Jack. *The Secrets of Wildflowers: A Delightful Feast of Little-Known Facts, Folklore, and History*. Connecticut: The Lyons Press, 2004.

Stedman, Edmund Clarence. *An American Anthology, 1787-1900: Selections Illustrating the Editor's Critical Review of American Poetry in the Nineteenth Century*. New York: Mifflin and Company, c1900.

Todd, Mabel Loomis. "Emily Dickinson's Letters," *Bachelor Of Arts I*. (May, 1895): 39-66. in Willis J. Buckingham. *Emily Dickinson's Reception in the 1890s: A Documentary History*. Pittsburgh, Pa.: University of Pittsburgh Press, c1989.

［Abstract］

Emily Dickinson and Indian Pipes

Mikako AGEISHI

In 1890, when the first edition of Emily Dickinson's "Poems" was published posthumously by Mabel Loomis Todd and T. W. Higginson, the cover was adorned with an illustration of Indian Pipes painted by Todd. Why were they used on the cover instead of roses, daisies or violets, flowers that Dickinson preferred and frequently referred to in her poems and letters? This simple question is the starting point of this paper. The picture on the book cover was based on a black panel of Indian Pipes which Emily received from Mrs. Todd late in her life, near the end of September 1882. This paper attempts to explore why Mrs. Todd drew the picture of Indian Pipes for Emily. In the hypothesis, some analogies between the Indian Pipes and Emily Dickinson are examined for their resemblance, firstly by physical aspects and then from a botanical or horticultural standpoint. The life force which Emily had as a poet, and how it connects with the Indian Pipe flower, are also discussed.

Key Words: Emily Dickinson, Indian Pipes, Gardening